

金管楽器演奏上達の為にアンサンブルは必要なのか？

上田 仁

Why do you need ensemble experiences to improve a brass instrument performance skill?

はじめに

この論文では金管楽器演奏上達の為にはアンサンブルが不可欠であるという結論を導き出すものである。一章では金管楽器の音を出す仕組みに触れ、運動競技選手のようなトレーニングの必要性を考える。二章では日本において金管楽器を始める環境、音大生の練習環境に触れ、三章で演奏技術向上のためにアンサンブルが必要との結論を導く。最後にまとめとして2020年度に行った実際のコンサート記録を記しておく。

1章 金管楽器とはどんな種類の楽器であるか？

金管と言うぐらいであるからして金属で出来ているから金管楽器という説明で誤りではないのだが、木管楽器であるフルートは金属で出来ている。フルートの元は木で作られていたから、という説明も出来なくはないのだが、同じく木管楽器のサクソフォンは1846年に誕生した時から金属で作られていた。実は金管楽器はすべて音を出す仕組みに共通の特徴があり、金属で作られていなくてもこのような仕組みによって音が作り出される楽器はすべて金管楽器ということにカテゴライズされる。

金管楽器の音を出す仕組み

すべての金管楽器は唇の振動を楽音に変える仕組みを持っており、“唇の振動を発音体にする楽器＝金管楽器”という説明が正しいという事になる。つまり自らの肉を振動させ音楽を奏でる訳であって、体調やメンタルなど演奏家の身体的な状況が音や演奏に如実に表れる楽器の一つと言うのがお分かり頂けたと思う。さらに言うと人間の声が年とともに変化していくように身体の発育、または老化に従って音色や演奏技術にも変化が表れる。365日職業として演奏するプロ演奏家は日々の体調の変化などを細かく修正しながら活動を続ける必要があるし、若年層の児童、生徒などの学習者は身体の発育を待つ必要がある。

金管楽器演奏に必要な身体的条件とは

金管楽器はまずマウスピースと呼ばれるものに唇の振動を伝える必要があるので、前歯4本にマウスピースをしっかり受け止め、演奏に必要な振動が逃げないようにする必要がある。つまり、楽器を始める時期は永久歯に生え変わった後に始めると良いとされている。事実小学校の鼓笛隊、金管バンドは早くて小学4年生、通常高学年になってからの活動を勧める教師も多い。また金管楽器の中で一番大きなチューバという楽器は重量が10キロ以上もあり、体格に恵まれた児童が担当する事が多く（そもそも身体が小さいと演奏不可能）身体的に適正を選ぶのは金管楽器の特徴とも言える。

金管楽器の音を変える仕組み

金管楽器で音楽を演奏する場合、ピストン、スライド、あるいはロータリーヴァルヴといった機構を使い、管の長さを瞬間的に変化させ、音高を調節する必要がある。ここで面白い（私はそう思う）のはこの組み合わせが7種類、多い楽器でも14～21種類しかないという事である。楽器の王様と呼ばれるピアノフォルテには鍵盤が88鍵もあり、金管楽器はそれには到底及ばない。当然7個の音だけでは様々な音楽を演奏する事が不可能なので、同じ指使い（運指）で複数の音高を演奏する事になる。自然倍音と配列が同じなので混同されがちであるが、唇の締め具合、マウスピースに対する圧力（プレス）息の圧力などを総合的に変化させることによって金管楽器奏者は同じ運指でも様々な音高の音を奏でる事が出来る。この音の配列は自然倍音と全く同じ配列で、高次倍音になればなるほど音の間隔が狭くなり、音ミスの（音をはずす）可能性が高くなる。フレンチホルンが木管楽器のオーボエと並んで世界一難しい楽器としてギネスブックに認定されているのは、音の間隔を狭い高次倍音音域を頻繁に演奏する必要があるという理由に起因する。

金管楽器演奏に必要な筋肉

一般にアンブシュアと呼ばれる“金管楽器を演奏する為に必要な唇の形”を動作させるのは口輪筋と呼ばれる“唇を取り囲むドーナツ状の筋肉”だが、実際にはかなり広範囲の顔面の筋肉を連動させ演奏をコントロールしている。それに加え高い圧力の呼気を送り出したり、楽器の中に呼気を入れようとした際に感じる強い抵抗力に耐えうるお腹の筋肉の鍛錬も必要で、この様な一朝一夕には身に付かない筋肉を不断の身体的なトレーニングによって育てていく必要がある。筋肉は使うと疲労し、その後の休息によって強くなる。その点は運動競技選手と同じであり、効率の良い学習をするためには技術的な練習とは別にトレーニングメニューを組み立てる必要がある。

2章 日本における金管楽器を始める環境

ピアノフォルテや絶対音感が必要とされるヴァイオリンは3~4歳の頃から音感教育と平行して楽器の学習を始める事が良いとされているが、金管楽器は前述の理由から早くて小学校高学年、遅くても中学生の時分に始めた人がプロになるケースが多く、そのほとんどが小学校の鼓笛隊や金管バンド、中学校の吹奏楽部で金管楽器に出会っている。

ピアノフォルテやヴァイオリンは個人的にレッスンに通う事で学習を進める事が出来るが、金管楽器は最初から吹奏楽という合奏に参加することで学習を進める事になる。(その為、一人で演奏する独奏の教育が遅れたり、専門的な手ほどきを受ける事なく先輩や顧問の先生のアドバイス、または独学で奏法を身に付ける問題もあるのであるが、その点に関してはまた別の機会に論じる事にする。)金管楽器はピアノフォルテやヴァイオリンなどと違い単音しか演奏する事が出来ないため、合奏や他の楽器の助けがない限りコンサートやコンクールなどで演奏することが困難であり、アンサンブルや合奏体の中で演奏することが唯一無二の選択肢となる。

また自宅に防音環境がない世帯にとっては、学校以外にのびのびと金管楽器の音を出せる環境を見付ける事は非常に困難であり、この点からも小中高校のスクールバンドが金管楽器を始めるきっかけになっている理由が見て取れる。

音楽大学生にとっての練習環境

金管楽器を始めたきっかけがスクールバンドである金管楽器専攻の学生は自宅に練習環境がない事が多く、大学施設を使って練習をすることがほとんどで、朝から夜まで楽器を吹いている。他の楽器の学生や教員からは「どうして効率よく練習出来ないのか」と思われているかどうかは分からないが、長い時間大学にいる事には訳がある。金管楽器は自らの唇を振動される為に長時間練習を続けるのは不効率であると言われている。アンブシュアを機能させるのは筋肉だが、アンブシュア自体は唇という皮膚と粘膜の間の組織なので、酷使すると腫れ上がったり、痛くなったり、楽曲を演奏するために必要な振動を作り出せなくなってしまう。(バテ) またアンブシュアを機能させる筋肉も使えば疲労し、回復には時間がかかる、その両方の理由から短時間で集中した練習より、こまめに休憩を取りながらダラダラと練習(そう見える)した方がかえって効率が良いのである。

3章 アンサンブルが金管楽器の技術向上につながる訳

金管楽器を学習するものが身体的なトレーニングが必要である事、また楽器の構造上同時に複数の音を演奏する事が困難である事を述べてきた。そして金管楽器を始める、または学習する環境は小中高校が適している事も踏まえて、金管楽器上達にアンサンブルが必

要なのかを改めて考えてみたい。

アンサンブルとは

服飾業界でアンサンブルとはコーディネートにおける協調性、関連性の事を指すが、音楽業界では、他者との共演を指す。つまり同じ楽曲を他者と一緒に演奏する事であって、金管楽器奏者はリサイタル（独奏コンサート）であっても、ほぼ100%ピアノフォルテなどの鍵盤楽器と共演する必要があり、アンサンブルは音楽を演奏する事を同意語となっている。オーケストラや吹奏楽などの合奏体は指揮者が演奏を取り仕切り、音楽的な方向性を示すことになるので、アンサンブルではなく、合奏という表現を用いたい。アンサンブルと合奏の定義は人数規模で分けられるものではなく、指揮者の有無で分けられるべきである。

身体的トレーニングとアンサンブル

身体的なトレーニングは演奏する事で蓄積する疲労と休息のバランスを考える必要がある。その点アンサンブルは演奏したのち、演奏した音や楽譜の間違い、テンポ、リズムのズレなど、統一感のある演奏に必要な箇所の修正を行う為、仲間（共演者）とディスカッションを行う必要になる。その際演奏に必要な唇や筋肉は休息する事になり、疲労と休息のバランスを取りやすい。個人の練習では夢中になって練習するあまり疲労が休息を勝り、結果としてバテを早め、練習時間を縮める事になる。逆にトレーニングに必要な適度な負荷という意味においてアンサンブルは共演者が演奏を続ける間は自分も演奏続ける必要があり、個人練習では疲れて止めてしまう状況でもアンサンブルでは演奏を続けざるを得ないという事がトレーニングにとって最も効率が良いと考えている。稼ぎたいのは楽器を吹いている総時間であり、一般的に良いと考えられている濃く短い時間の練習が金管楽器学習には必ずしもベストではないという事を記しておきたい。

金管楽器を始めた環境、楽器の構造とアンサンブル

ほぼ100%スクールバンドで楽器を始める事になった金管楽器奏者は音楽キャリアのスタートから合奏を経験しており、同時に1つの音しか出せない金管楽器の構造と相まって、他者と一緒に演奏する事=音楽をやることという図式が成り立つ。合奏やアンサンブルでは自分の音はもちろん同時に共演者の音程、音の表情、テンポ、リズムなどたくさんの情報をキャッチする必要があり、譜読みと呼ばれる作業“自分が担当するパートの楽譜を正確に余裕をもって演奏出来るようにしておく事前練習”が必要となる。その際は当然個人練習になるので、担当するパートによっては曲の全体像が見渡せない事が多く、アンサンブルの練習“合わせ”において初めて楽曲を理解する事が出来る。それは自分が音楽を演

奏している手ごたえを強く感じる瞬間であり、仲間と一つの物を理想の形に成型していく楽しい作業である。

これらの理由から金管楽器専攻生の身体的トレーニングを促すために6回の試演会、5回の学外コンサートを行った。以下はその記録である。

名称：第一回トランペットメイジャーズ試演会

日時：2020年6月25日（木）18：30開演

会場：名古屋音楽大学101教室

出演：高野楓、森川春香、村田香菜子、中山颯太、高柳亜緒衣、西田宗正、上田じん

曲目：トランペットとピアノの為のソナタ：P.ヒンデミットなど

名称：第二回トランペットメイジャーズ試演会

日時：2020年7月1日（水）18：00開演

会場：名古屋音楽大学C101教室

出演：柳楽円香、高野楓、森川春香、植本莉央、國枝航大、村田香菜子、鈴木レミなど

曲目：トランペット小協奏曲：A. ジョリヴェなど

名称：THE BRASS STRIKES BACK めいおん☆アンサンブル研究部

日時：2020年7月3日（金）19：00開演

会場：ドルチェ・アートホールNagoya

出演：高野楓、脇山純名、河原有希、加藤寛人、上田じん

曲目：空想おもちゃ夢：G. ファーナビーなど

名称：めいおん☆アンサンブル研究部 サマーコンサート

日時：2020年7月22日（水）

会場：大一美術館

出演：高野楓、脇山純名、河原有希、加藤寛人、上田じん

曲目：空想おもちゃ夢：G. ファーナビーなど

名称：めいおん☆トランペットメイジャーズ試演会と練習会

日時：2020年7月28日（火）18：45開演

会場：名古屋音楽大学C101教室

出演：中山颯太、中崎桃香、鈴木レミ、めいおんトランペットメイジャーズ

曲目：径：武満徹、コンクエスト：E.モラレスなど

名称：めいおん☆トランペットメイジャーズ 真夏の夜のコンサート

日時：2020年8月7日（金）19：00開演

会場：ドルチェ・アートホールNagoya

出演：めいおん☆トランペットメイジャーズ

曲目：組曲：R.L.プレスティなど

名称：トランペット店舗コンサート

日時：2020年10月31日（土）13：00、15：00開演

会場：ヤマハミュージック名古屋店1F

出演：めいおん☆トランペットメイジャーズ

曲目：コンクエスト：E.モラレスなど

名称：第三回トランペットメイジャーズ試演会

日時：2020年11月10日（火）19：00開演

出演：中山颯太、植本莉央、國枝航大

会場：名古屋音楽大学C101教室

曲目：トランペット協奏曲：F.J.ハイドンなど

名称：第四回めいおん☆トランペットメイジャーズ試演会

日時：2020年11月19日（木）18：30開演

会場：名古屋音楽大学C101教室

出演：中山颯太、村田香菜子、高野楓、森川春香、柳楽円香

曲目：トランペット協奏曲：A.アルチュニャンなど

名称：第五回めいおん☆トランペットメイジャーズ試演会

日時：2020年12月23日（水）18：30開演

会場：名古屋音楽大学C101教室

出演：西尾万優、西田宗正、高柳亜緒衣、鈴木レミ、上田じんなど

曲目：マイナスワンによるカラオケ演奏

名称：第六回めいおん☆トランペットメイジャーズ試演会

日時：2021年1月21日（木）16：50開演

会場：名古屋音楽大学C101教室

出演：村田香菜子、柳楽円香、中村依里香、高野楓、高柳亜緒衣、中崎桃香、中山颯太

曲目：トランペット協奏曲：G.タルティーニなど

名称：めいおん☆トランペットメイジャーズコンサート

日時：2021年2月17日（水）18：00開演

会場：ザコンサートホール電気文化会館

出演：めいおん☆トランペットメイジャーズ+藤島謙治、井上圭、上田じん

曲目：コンチェルティーノピッコロ：J.クーツィール

まとめ

以上12のコンサートを研究テーマの実践として行った。今年度は主催者、ホール、大学の定めるコロナウイルス感染症対策を講じながらの興行となり心を砕いたが、学生や聴衆の協力の下、安全にコンサートを行う事が出来た。音楽演奏技術上達は数字で表せるものではないので、私の主観を文章で表す事しかできないが、合わせやコンサートの準備の為、十分な練習量が確保出来た事や回を重ねるごとに下級生の参加も増え、演奏する事への動機、やりがいを与え、本番で演奏する楽しみを体感させる事は出来たと思う。